西ケニヤ農村ブタリの生業形態

——環境利用の一方式——

大　森　元　吉

I　はじめに

1　課題と調査

個人あるいは集団としての人間は，いずれも自然条件や社会状況など環境の制約下に置かれる。しかし人間はたんに受動的に外界の支配に服するのではない。むしろ自ら諸種の環境を構築することにより，外的諸条件への対応を可能にする。集落や家屋，畑地その他の設定および配置，多様な生業形態，労働力組織化の型式はいずれも自然の物理的環境への対処と見てよい。近親，姻戚，近隣居住者などの社会的類別（social classification）と相互作用（interaction）の制度化も人的環境の整備と考えられよう。また祭式，儀礼など呪術・宗教的行為の取り決めは，神霊を含む超自然的環境との調和方式にほかならない。いずれもが人間を囲んだ時空の拡がりとコミュニケーションの輪への対応であり，個人および集団側からの積極的働き掛けである。これら対応の諸方式が個別地域文化の内実を構成し，特有の「構築された環境」（built environment）生成の要因をなす。[1]

環境の構築は包括的に観察され，連鎖的波及効果が検討されるべきである。しかし本稿では西ケニヤ在住バンツー系農耕民の生業形態に限定して自然界，技術，政治・社会的状況への対応を概観するに留めたい。調査は1984年12月以降の研究休暇中に８ヶ月間ケニヤに滞在して実施した。すなわちナイロビ大学アフリカ研究所（Institute of African Studies）の準調査員資格で，「ブタリ（Butali）村開発における自発的協力の成果」

調査許可を政府から取得した。研究の意図は住民間互助協力による社会基礎的施設(infrastructure)充実整備の実績を見，共同作業推進に必要な住民組織化，管理運営，事業完遂に到る過程追跡にあった[2]。予備調査は1984年7月，本調査は1985年1月から11月，追跡調査は1986年3月に実施した。その間ブタリ村に6ヶ月連続して滞在し，残りは南方30km のカカメガ(Kakamega)市から路線バス利用で反復訪問した。

ブタリ村近辺では農業，手工業，商業が主になるが，生業分化は未だ不明確でいずれも農耕と兼担で営まれた。少数の公務，教職，製造加工業の従事者も農地保有に固執した。生計維持基盤はいぜん農耕にあり，主要産物の白とうもろこし(white maize)栽培に熱心であった。しかし耕地面積に比べて収穫量は乏しく，各戸自家消費を充たすに留まった。白とうもろこし売却は法規，流通機構，輸送手段の不整備に制約された。他方で，換金に適した砂糖きびは生育に18ヶ月を要し，所有耕地豊かな農家のみ栽培可能であった。この場合も製糖工場の稼動能力劣化と代価支払遅延が生産意欲を減退させた。農業収入のほぼ全額は生計維持と教育費に充当され，生産規模拡大ないし他産業投資の余裕は乏しかった。専門知識，技能，資本力に欠けた近在農民はわずかに零細手工業や商業に活路を求めた。家具・建具製作，左官，大工，行商，小売商などであった。これら農業外収益が住民階層分化を導いた。

こうした現況を踏まえ，東アフリカ熱帯高地における環境利用を生業形態，とりわけ作業，労力，経費，収益，消費の諸面から検討を加え，包括的な視座から問題点を究明したい。

2　自然環境

調査対象に選んだカプラス族居住地はヴィクトリア(Victoria)湖の東北に位置した。赤道の北寄り(0°55′N)で，東経35度線の西側(34°50′E)に当たる。北方にエルゴン(Elgon)山4,322mがそびえ，東にナンディ(Nandi またはエルジェヨ Elgeyo)断層崖が迫った。西方は緩やかに下降する丘陵がはるかウガンダ国境まで連なった。南のウィナム(Winam ま

たはカヴィロンドKavirondo)湾まで南北およそ100km，東西ほぼ120kmにわたる台地が，バンツー系ルイヤ(Luiya)語群およびナイル系ルオ(Luo)族の居住圏であった。カブラス族は今世紀初めまでにこの地方中央部に進入して，定着を果たした。

ブタリ村は低い丘陵を縫って北へ流れるチェバイワ(Chebaiywa)川とナムビリマ(Nambirima)川の中間にあった。ふたつの川と平行に，南のキスム(Kisumu)市，カカメガ市から北のキタレ(Kitale)市に通じる幹線自動車道が通過する地点であった。ブタリ村近辺は海抜1,600mほどの台地を成し，丘陵上の平坦地および側面の傾斜地に数百メートル間隔で家屋群(compound)が散在した。いずれも数エーカーの宅地に数棟の草葺円錐屋根の土壁円型家屋，ときにはトタン葺切妻屋根のレンガ壁方形家屋を配置し，周囲に炊事小屋，穀物倉庫，便所，家畜小屋を集合させた。居住区域をバナナ樹，ユーカリ，糸杉で囲い，残る広大な畑地に白とうもろこし，砂糖きび，豆，芋など植付けた。また家畜放牧用の空閑地を設けた。農家それぞれの所有地境界上には繁茂に任せた雑木かサイザルを配した。ユーカリの巨木が点在するほか一望千里の起伏がはるかに西の地平線に展開した。

ブタリ村一帯の土壌は斑岩ようの花崗岩(porphyritic granite)が風化した粘土で，エルゴン山噴火時の飛来物質の混入があった。[3] 土壌は浅く地下1mほどで岩盤が阻んだ。表土は降雨でたやすく軟化して泥状となったが，乾燥後は堅く凝固して耕作を妨げた。赤褐色の紅土(laterite)地層は少く，白茶けて降雨時のみ黒褐色となる表土層が広がった。土壌は強度の酸性(pH 4−5)を示した。平均気温は年較差が5°C程度であったが，日較差は昼夜の暑冷の激しさを反映して10°C以上になった。平均すれば気温は2−4月，10月および11月に22°Cと高く，6−8月には18°Cに低落した。[4] 低冷時には屋内での炭火採暖が，とくに夜間降雨の場合に，広く見られた。

降雨量は推定で年間1,000−1,100mm程度であった。カカメガでは

1,175mmであったが，往古の大森林が保全され降水量増加に役立った。ブタリ村にも南方にマラヴァ(Malava)森林が残存したが，面積は僅かで降雨量への影響は乏しかった。[5] 降雨は4月から9月にかけて頻度，水量ともに多く，10月以降3月までは少かった。ブタリ村付近では4月と5月，8月と9月にとりわけ降水量が大であった。多雨の季節には突風と雷の発生が常で，農作物への雹の害も少くなかった。

3　住民

カブラス族はルイヤ語を常用するバンツー(Bantu)系農耕民である。Kabras(またはKabrasi)は東側に隣り合ったナンディ族による他称で，自称としてニャラ(Nyala)を用いた。[6] 少くともカブラス族の一部は現在ヴィクトリア湖畔のウガンダ国境近くを占拠するニャラ(Nyala)族からの分岐である。またウガンダ南西部のアンコーレ(Ankore)族居住地から移住したヒマ(Hima)系統の氏族もカブラス族の一部と化した。[7] ルイヤ語使用のバンツー系諸族は紀元後1000年から1700年にかけてウガンダからケニヤへ東方移住を継続した。その過程で16世紀末から200年間支配的勢力を確保したコーネ(Khoone)族を北方へ駆逐し，現住地を獲得したのがニャラ族であった。この一連の部族抗争と移動の渦中で東進を続け，現住地に1885年頃到達した集団がカブラス族である。[8]

ブタリ村所在地，すなわちチェバイワ川とナムビリマ川中間は当初無住地帯で，カブラス族の狩猟およびナンディ族との戦闘場所であった。カブラス住民はナムビリマ川西側の小高い丘陵に空堀と泥積み囲壁の防塞集落(fort village)を築き，ナンディの侵攻を凌いだ。付近一帯は原生林に覆われ象，河馬，ハイエナ，鹿など野獣が多く棲息した。カブラスの青壮年男性は河馬の皮張り盾と長槍でナンディ戦士群に対抗した。ナンディ族の巧妙な夜襲と女性，家畜の略奪は，1895年に植民地政府がカブラス族を保護下に置いて以後終息した。[9] 近隣の平和確立に伴い，ナムビリマ川東岸の開墾が進行したが，その際タリ(Tali)氏族はタンデ(Tande)からブタリへ，トボ(Tobo)氏族はシヴァンガ(Shivanga)からチェブワ

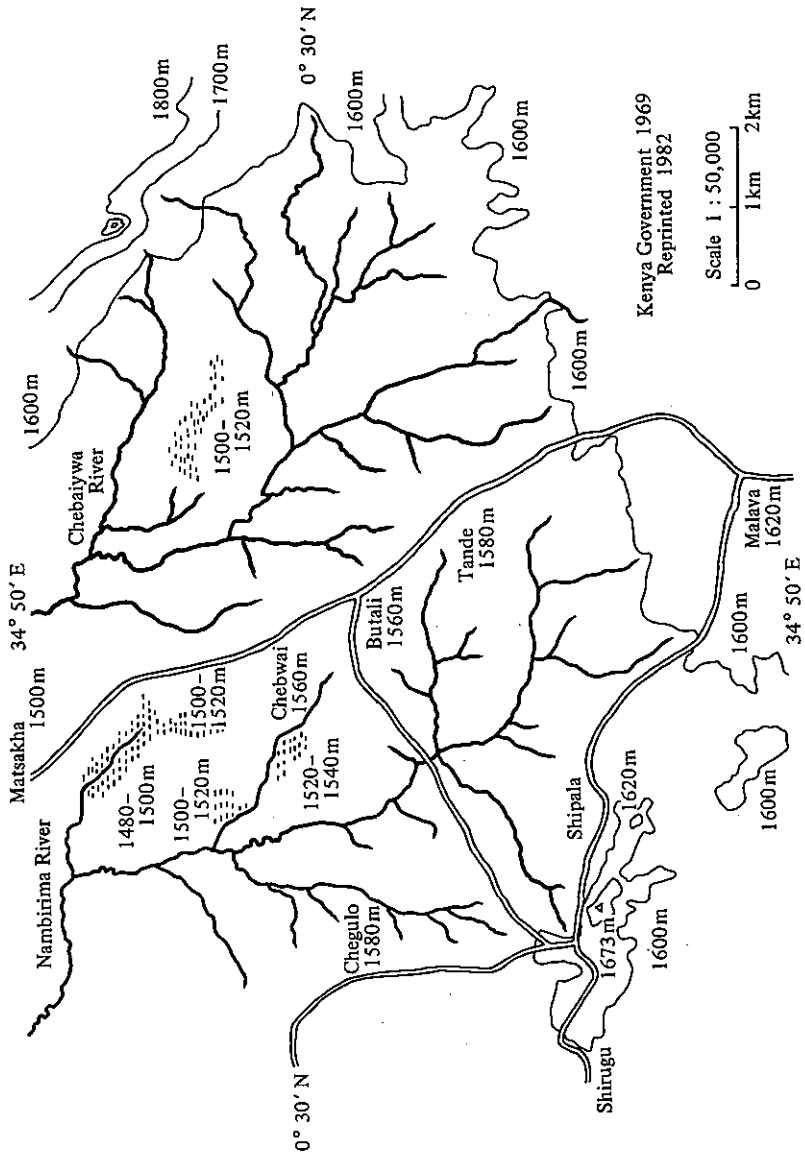
1800m
1700m
0° 30′ N
1600m
1600m
1600m
1600m
Kenya Government 1969
Reprinted 1982
Scale 1 : 50,000
0 1km 2km
1600m
Chebaiywa River
1500–1520m
34° 50′ E
Tande 1580m
Malava 1620m
Butali 1560m
Chebwai 1560m
Matsakha 1500m
1500–1520m
1480–1500m
1500–1520m
1520–1540m
1600m
34° 50′ E
Shipala
1620m
1600m
Nambirima River
Chegulo 1580m
1673m
1600m
Shirugu
0° 30′ N

図 1

イ(Chebwai)およびチェグロ(Cheglo)へ，またシュ(Shu)氏族はシルグ(Shirugu)とシパラ(Shipala)からナムビリマ川南岸へ進出し定着した。(図1)

カブラス族の人口は1918年の国勢調査で9,252人であった。また1932年のセンサスでは1万829人となった。最近では12－13万人に達したと推測される。[03] カブラス族は大多数が西部州カカメガ県のカブラス郡に居住した。ケニヤは全国を8州(province)，さらに40県(district)に分けて統治した。各県は数箇の郡(division)，行政村(location)，大字(sub-location)に順次再区分された。大字までは国家行政単位で，大統領府直属の行政官が配置された。ケニヤは強力な中央集権統治をしき，少くともカカメガ県内には地方自治や部族自律性は認められなかった。ブタリ近辺の伝統的地域区分は字(village)であった。字は道路や小川など自然物を境界とした近接居住・耕作の地域的拡がりで，形状・面積とも差異に富んだ。数箇のvillageが単一行政区画，すなわち大字に包括された。各village住民は長老(elder, *liguru*)を互選し，紛争の調停や大字の長(sub-location chief)の補佐に当たらせた。リグルの任期は不定で，政府からの報酬支給なしの名誉職であった。

カブラス郡は南北2村に分かれた。北カブラス行政村の大字7箇にブタリが含まれた。大字ブタリはナマンジア(Namanjia)，タンデ(Tande)，マニョンジェ(Manyonje)ほかの字から，また北隣りのマツァハ(Matsakha)も大字でムユンディ(Muyundi)，チェブワイ(Chebwai)，チェグロなどの字から構成された。大字の境界は人為的に定め，人口増加に伴って改訂された。本稿では行政上の区画設定にとらわれず，ブタリ交易センター周辺にまたがる大字ブタリと大字マツァハの各一部区域を対象とした。

II　農耕

1　作物と農耕暦

この地方では年間の降雨量推移に対応する農耕暦を守った。中心作物

の白とうもろこしは3月から4月にかけて播き，6ヶ月後に収穫した。栽培品種は4ヶ月で収穫可能な早生があり，湿地では晩生との併用で年間二期作もできた。いんげん豆は3月から7月の間に白とうもろこしと混成で植付けた。また，とうもろこし収穫後の10月から3月にかけても作付けた。落花生はいんげん豆と同じ時期に年間二期作をした。さらに甘藷は9月に茎を差し，翌年1月以降収穫した。甘藷も3ヶ月で成熟できる品種と7ヶ月必要なものがあった。砂糖きびはとくに定まった植付け時期はなかった。しかし18ヶ月後の収穫が雨季に遭遇して搬出困難となるのを避ける配慮を要した。

地味保全のため輪作が行なわれた。まず白とうもろこしを3年連続して作付けた。次に砂糖きびを2－3期，つまり3年半から5年間栽培した。その後に落花生，いんげん豆を育て，再びとうもろこしを植付けた。耕地面積に余裕があれば，砂糖きびの2期連作の後，2年間休閑させた。ただし作付けと休閑期間の長短は，施肥の有無および肥料の質量に応じて変動した。

2　とうもろこし栽培

この地方に最初導入されたのは黄とうもろこしであった。しかし1920年代後半にフレンド教会の米人牧師の尽力で，白とうもろこし(white maize)が普及した。カブラス族はそれ迄もろこし(sorghum)，粟(finger millet)，調理用バナナ(plantain)，甘藷を常食とした。1927年以降から白とうもろこしが主食の座を占め，青年以下の世代は旧来のとうもろこしを賞味する味覚を喪失していった。

とうもろこし畑は播種の前に，去勢牛4頭か6頭の曳く犂で2度すき起こした。前年収穫した後の枯れ葉や茎，放牧した家畜の排泄物を土壌に混入させた。播種は3月末か4月に雨季接近を見越して行なった。畑に紐を長く張り，直線上に小孔を掘り揃えた。前夜から水に浸したとうもろこし粒を乾燥牛糞少々と小孔に落とした。犂耕および播種は男の仕事であった。播種後に女たちが手鍬で小孔をふさいだが，水浸済の種子

は最短で2週間乾燥に耐え，降雨を待って発芽した。ただし人工肥料で代替した場合には，種子の腐敗が早まり，2週間の持続に耐えなかった。

播種の直後に混合肥料(complex fertilizer)を施した。デンマーク製のSuperfosを1エーカー当たり100kg与えた。購入価格は50kg詰袋が271シリングであった。この際さらにアンモニアを併用すれば効果が増強された。播種後2ヶ月経過以前に2度の除草を必要とした。主として女たちが除草に従事した。また播種から3ヶ月目にアンモニアを追肥した。適量は1エーカー当たり100kgで，販売価格は50kg詰袋が296シリングであった。ただし休閑期間を長くとり牛など囲い込んだ畑地にはより少量の施肥で事足りた。

収穫量は施肥の有無，多少で差異が生じた。ブタリ村近在では十分な施肥の代償として1エーカー当たり18－24袋(穀粒90kg詰)を収穫した。施肥皆無ならば同一畑地から9－12袋のみ取入れた。1986年度のカカメガ県全体の白とうもろこし作付け面積は約10万ha(24万7,000 acres)で，収穫見込は170万袋であった。[11] この数値からは1エーカー当たり7袋未満の貧弱な収穫となる。なお同県内の白とうもろこしは，生産量の3分の1近くが政府へ売り渡され，残りが自家消費用に各農家に保存された。しかし現実には相当な量が県外へ非合法的に売却され，現金化された。

白とうもろこしは成熟後，畑地に立枯れ状態で放置し，後に房だけを摘取した。残った茎と葉は焼却して畑地に還元する例もあった。房は天日乾燥して，草葺屋根編み枝壁面の貯蔵庫に収納した。通風も雨水の浸透も自由な円筒型小舎であった。脱粒は調理と売却時に，また袋詰めは政府への売却時にのみ実施した。穀粒は交易センター所在の製粉所で少量ずつ粉に加工し，食事(ウガリ，Ugali)調製に当てた。各農家とも収穫量の正確な計測は不可能で，推計に頼るほかなかった。最近は保存中の害虫駆除のため化学防虫剤Malaton 2％含有粉末の使用が普及した。

とうもろこし，もろこし，粟の生産地外部への移送は政府交付の許可証を必要とした。白とうもろこしの売却先は政府の穀物生産局(Cereals

& Produce Board)に限定された。政府の買付け価格は白とうもろこし粒90kg詰袋が175シリングと定められた。しかし非合法な穀物取引きが一般化し，仲買人が個別訪問して集荷した。農家は政府買付け所への搬送，代金支払延滞を避け，非合法取引きを活用した。売渡し価格も端境期には高騰した。例年収穫期の11月末には穀粒90kg詰1袋で165シリング程度に低落したが，収穫直前には同量で240シリングと高値をつけた。非合法取引きの出荷先は東のリフトバレー(Rift Valley)または南のキスム方面であった。

3　砂糖きび生産

砂糖きびには2種類があった。茎太で軟質の品種は賞味用で，湿地で生育した。精糖用の品種は西欧から渡来し，乾燥地が好適であった。作付け面積と時期決定は栽培者の任意とされた。しかし収穫の日時は，運搬および製糖能力との関連で工場側の合意を必要とし，貨物車(lorry)またはトラクター差向けと集荷時刻指定を交渉した。齟齬発生の場合には伐採済砂糖きびは過度に乾燥し，品質劣化，価格低落が不可避となった。砂糖きび生産の拡大にはこの種の危惧払拭が望まれた。

切断した茎の畑地挿入から伐採まで18ヶ月を必要とした。作付け後1ヶ月，4ヶ月，さらに7ヶ月それぞれに除草を行なった。砂糖きびは旱魃に耐えるが，十分な排水が求められた。しかし白ありの駆除以外に目立つ虫害対策の必要はなく，また病疫の恐れも小さかった。ただ，ブタリ近在では強風と雹による折損がひんぱんに発生した。発芽時と8ヶ月後にUREAをエーカー当たり150kg施肥すればよいが，50kg詰袋が262シリング強の高値のため，使用は稀であった。施肥すれば甘味が減じ，茎が長伸して倒伏し易いとの否定的意見も有力であった。立枯れた茎，葉，根はすき込み，家畜を放って排泄物を混入させ地味保全を図った。

個別農家ごとの砂糖きび作付け面積は狭小であった。保有耕地の大半は自家消費用白とうもろこし生産に優先使用し，換金作物ながら長期育成が必要な砂糖きび栽培には慎重であった。20エーカー以上の耕地保有

農家も砂糖きび作付けは2—3エーカーどまりとした。[12] 他作物との混成が不可能なうえ，政府直営工場の処理能力不足と代金支払遅延が生産意欲を大きく阻害した。買上げ価格は公定で，1985年はトン当たり270シリング，後に300シリングと決まった。西部州にはンゾイア(Nzoia)およびムミアス(Mumias)所在の二大製糖工場が操業中であったが，地元農家は他の小規模私営工場への砂糖きび売却を好んだ。

いずれも1985年6月の例であったが，農家2戸が砂糖きびの収穫と売却を行なった。1戸は2エーカー分(トラック3台，恐らく20数トン相当)をタチョニ(Tachoni)製糖工場へ引き渡し，代金3,600シリングをえた。トン当たり170シリング強に当たる。他の1戸は同じく2エーカー分(トラクター4台，およそ31トン)をWestern製糖工場へ搬送し，トン当たり185シリング，全額で5,735シリングを受領した。2例とも私営小規模工場であった。トラックとトラクターはいずれも工場所有機材であったが，借料と燃費は生産農家が負担した。ただし農家の手取り額は公定価格，すなわち政府直営工場へ売り渡した場合の7割に留まった。[13]

III　手工業

1　養成

伝統的技術は生産，居住，調理ほか生活諸面に根強く存続した。しかし伝統的技術のみに基盤を置く生業は，もはや生計維持の主要手段とはなりえず，農耕，家畜飼養，手工芸，交易すべてに西欧技術および用具利用が浸透してきた。先進知識と技法は学校教育による普及が大きかったが，とくにケニヤでは技芸専門学校(polytechnic)の役割が顕著であった。全国で320余校が設置され，おもに15—20歳の青年男女3万5,000人が就学した。[14] 大半は地元住民の経費負担によるハランベー(harambee)学校で，必要最小限の用材・機器を設備して，2ヶ年間技能訓練を施した。しかし実務に携わるに足る技能の習熟には，学校修了後も現業職人のもとで徒弟修業に就く必要があった。

ワシケ(注(12))の長男チルイ(Chiluyi, 24歳)は家具・建具職人を志向した。はじめにブタリ近辺のKabras Village Polytechnicで2ヶ年就学した。授業料年額1,000シリングを納付し，家具・建具製作の基礎訓練を受けた。同校には左官および縫製仕立の修業課程もあった。チルイは同校卒業の後モンバサ(Mombassa, 約900km)市に出て，キクユ(Kikuyu)族職人に師事し8ヶ月修業した。工具と用材は供与され，賃金もえたものの失策のたびに用材費を差引かれた。1985年初めに帰郷したが，工具と用材購入の費用を欠き，農耕のかたわら専業化の機会を伺った。

2　製作

モンバサ市滞在中および帰郷後に，一部父親の援助を受けてチルイは以下の工作用具を入手した。金槌と曲尺，中古の金属製かんな（英国製品）の3品（合計代価1,000シリング），のみ(価格不詳)，手挽き鋸（中国製品50シリング），巻込式スケールおよび砥石(2品合計50シリング)，金属製圧着具(締め具，価格不詳)であった。また未購入ながら専業化実現に必要な工具として荒削り用かんな，一定幅で線引きする木製工具(一種の墨壺)，平板を円盤状に切抜く鋸があった。いずれも単品500―600シリングの価格であった。技芸専門学校就学の授業料2,000シリングに加え，以上の工具一式の購入費3,500シリング以上が，家具・建具製作者の自立と専業化への必要最低資金であった。

これまでチルイが製作した家具什器は木製簡易ベッド，低い長方形テーブル，円形腰掛け，折畳み椅子，ベンチ，ベニヤ板製スーツケースであった。また建具は住居扉，窓の板戸，扉と窓の取付け枠であった。家具什器は自家使用とし，建具は他家新改築時に依頼を受けて製作した。低価格の糸杉やユーカリを用材としたが，建具と折畳み椅子，上質テーブルにはより硬質の木材を使用した。とりわけElgon teakはきわめて緻密な材質の，最高価な用材であった。チルイは宅地内湧水地に自生したオムショマ(omusyoma)樹を伐採し，折畳み椅子数脚を製作したが，1脚50シリングの商品となった。

灯油ランプの置き台は1985年9月に製作された。4脚やぐらの4 feet高の台であった。市販の糸杉角材(foot当たり3シリング)を脚と横木に，また糸杉平板を上段，中層，下部に水平張りして用いた。チルイは用材購入に合計50シリング支出した。まず所定の寸法に切断した角材4本に横木の嵌入孔を彫り込んだ。次に化学接着剤と金属釘で横木を脚に接合させ，締具により固定した。さらに上載せ板3枚を上，中，下の定位置に組込み，最後にサンドペーパーで磨き上げ，ニス塗装して完成した。市販すれば1台75シリングの代価をえたが，用材費を差引けばわずか25シリングの作業報酬に留まった。

3　需要，販路，専業化

家具什器と建具は地元でも多少の需要はあった。カブラス族の慣行で，成年に達した息子各自に独立家屋を新築して与えた。成人の節目は以前は割礼であったが，最近は満18歳の住民登録時とした。[15] 草葺土壁の住居自体は本人の父兄の尽力で建ったが，扉と窓の板戸，取付け枠は職人の手を借りた。簡素な家具什器一式も市販品を求めた。簡易木製ベッド，テーブル，腰掛けと椅子数脚であった。西欧スタイルの家具は，ソファ単品が3,000シリングと高値で農家への普及度は低かった。

簡易木製家具は販路が局限された。人口急増で什器類の需要が高い都市部では，鉄製簡易ベッドを汎用し，椅子やテーブルも専門販売店で購入した。[16] 家具什器の都市内製作・販売ネットワークの枠外にある地方在住職人は，地元交易センターに販路をえるほかなかった。販売数量，収益とも多く望めなかった。ブタリ近辺では，家具職人の自立と専業化はカカメガ市などで雇傭の場をえるか，交易センターに販売所を開くかに限られた。開業の場合，店舗賃借料と営業許可交付料の納付，工具，用材の購入に多額の資金を必要とした。

チルイは自立，専業化の途を被傭に選んだ。当初1ヶ月間の住居，食料の費用は自弁であった。節減のため市街地を1.5km離れた小集落に間借りして室料100シリングを支払い，自炊生活を営む計画を立てた。

雇傭の際に技能検査があり，用材切断面，のみ入れの具合，接合部の疎密度の判定が採否の鍵となった。

Ⅳ　交易

1　定期市，商人

ブタリ交易センターには1929年頃から市が立った。カブラス族首長がここを定例会議の場と定め，参集者目当ての交易が活発化した。カブラス族は集権的統治機構を欠き，個別小規模な防塞集落単位の自律自治を存続させた。しかし20世紀初頭に西方からワンガ(Wanga)族が勢威を拡げ，ルイヤ語系の住民全体を統治下に収めた。カブラス族居住地には1907年にルトミア(Lutomia)が首長として来住した。しかしムフンゴ(Mufungo)がカブラス族自治の抵抗と請願を続け，植民地政府は1929年にワンガ族出身者を廃し，カブラス族のムルピ(Mulupi)を任命した。ムルピ首長はタリ氏族(Batali)出身者で，タリの土地，すなわちブタリに執務所を置いた。公的会合(*baraza*)は毎週月曜に招集され，参集者を対象に市が立った。

カブラス族居住地は1961年に南北２ヶ村(location)に分かれ，ブタリの北８kmのマテテ(Matete)と，南４kmのマラヴァ(Malava)に各チーフの執務所が開設された。しかしブタリの定期市は従前どおり存続し，毎週月曜と金曜に露天市が立った。専業商人や近在の農民が家畜，衣料，青果，乾魚，塩，日用雑貨，灯油を売買した。各交易センターは県の地方協議会(municipal council)の管轄下にあり，出店者は日額５－10シリングを納付した。柵囲いの露天市場の周囲にトタン屋根とブロック壁の常設商店が並んだ。1930年代は数店のみであったが，肉屋，パン屋，酒屋，製粉所，茶店，バー，ラジオあるいは自転車修理店，家具製作販売所など30戸内外を数えるに到った。しかし大半は食料雑貨を一括販売する非専業商人，すなわち農民経営の零細店舗であった。

2　仲買人

ブタリ在住のケヤ(Keya, 1943年生)は専業仲買人で，西南に160km隔たったヴィクトリア湖岸からブタリに乾魚を運び込んだ。すでに3年にわたり，ミソリビーチ(Misori Beach, Siaya県)へ週2回ナイルパーチ(*ombuta*)の仕入れに往復した。小型の魚はそのまま，やや大型は開きでともに油揚げ加工済であった。乗合自動車(*matatu*)と公共バス乗継ぎで，往復2日を要した。営業には自然生活省(Ministry of Wild Life)交付の移送許可証を受けたが，交付料200シリングを納付し，1ヶ年間冷凍以外の魚の搬送が許された。さらに1ヶ年有効の営業許可ライセンスも不可欠で，毎年更新時に500シリングを徴収された。また年間25シリングの租税と，仕入れ毎の市場利用税若干額をミソリビーチとブタリの双方で支払った。仕入れ，卸売りとも現金決済で，ケヤは毎回仕入れ資金2,000シリングと交通費，運送料，運搬労務費など270シリング，税金35－40シリングを準備した。

仕入れ価格は季節に応じ変動した。出漁頻度に比例して乾季に低落，雨季に上昇した。深さ，直径とも約1mの円筒竹籠満杯の仕入値は，乾季に900シリング，雨季に1,300シリング前後となった。ケヤは通常このサイズを2籠，ときにはより大型サイズを1籠持参した。直接消費者や飲食店に小売りせず，行商を主とする女性対象に卸売りした。卸値は中型(25cm程度)の開きが1匹8シリング，やや大型(30cm程度)が12シリングで，1匹毎に2－3シリングの利得をえた。小売り値はこれらに50セントないし1シリング上乗せした。

油揚げ加工済の乾魚は直ちに食用可能だが，少量の水と玉ねぎ，トマトを加えて煮た。牛肉は公定小売価格で1kgが20シリングであったが，骨付き計量価格のため，乾魚がむしろ割安となった。農民の需要も活発で毎回ほぼ完売となった。ケヤ自身の粗利益は仕入値の25－30%と聞いた。粗利益から諸経費を除けば，毎回2籠仕入れた場合の純益は高値時に443(780－337)シリング，安値時に203(540－337)シリングと計上できる。各週2回，毎月8回の仕入れにより月間収益は，高値時に3,544シ

リング，安値時に1,624シリングと見込まれる。通年して月額平均収入は約2,000シリングであろう。

3　商店経営

チティアヴィ(Chitiavi, 1944年生)は畑地27エーカーを所有耕作するかたわら，ブタリ交易センターで常設商店の経営を始めた。中等教育終了後，ナイロビ市内の外資系会社で10年間経理事務を執り，後に経理士養成の専門学校で履修した。ブタリへ帰郷後は大字ブタリの長に6年間就任したが，地元の政争の巻添えで罷免され，1985年9月から商店経営に転身した。従前から兄弟6人共同名儀の土地建物を交易センターに所有した。つまり1976年に1/8エーカーの土地を3,800シリングで購入し，レンガ壁，トタン屋根の店舗兼賃貸住宅を新築した。チティアヴィの店舗は建物の一画約50m²を占め，近隣の店舗の2倍の面積があった。食料雑貨店営業に当たりカカメガ県の地方協議会に年額380シリング，また中央政府に年間80シリングを納付して許可証をえた。個人商店の収益は，行商や仲買い従事者の所得と同じく非課税とされた。学校卒業者の就職難緩和のため政府奨励の自営(self-employment)促進の措置であった。

仕入れ商品の種類と数量はチティアヴィの判断に従った。常置商品は70品目以上あり，主要商品は食品，調味料(固型食用油脂，マーガリン，小麦粉，砂糖，塩，カレー粉)，清涼飲料，クッキー，キャンディー，食パン，卵，洗剤，石けん，調髪油，タバコ，電池，マッチ，歯磨きクリーム，ワセリン，噴霧殺虫剤，包装紙，麻ロープ，薬剤(アスピリン，マラリア治療薬)があった。仕入れ元はマラヴァ所在のクァランダ(Kwalanda)の商店で，原則として現金取引，全品買取り制であった。クァランダは白とうもろこし売買で財を成し，全国規模の大企業東アフリカ産業会社(EAI)からカブラス郡一帯の総代理店，すなわち卸元の権利をえた。その際100万シリングを預託した。[17]

チティアヴィ商店の1985年9月の販売実績は次のとおりであった。9月当初の在庫は9,433シリング相当の商品で，同月中の売上げ高は1万

1,873シリングであった。差引き利益は2,454シリングとなった。仮に借用店舗であれば家賃月額150シリング，また販売員1名毎に給与月額200シリングを計上し支出する必要があった。販売実績と利益は翌月さらに上伸した。10月当初の在庫商品仕入価格は1万305シリングで，月末までに1万4,260シリングを売上げた。月間利益は4,000シリング程となり，販売品目も9月初めの70から90に増加した。ただし販売実績の上伸はやがて停滞に向かった。9月から10月は白とうもろこし収穫期で，年末12月のクリスマス祝祭まで農民の消費意欲は旺盛だが，年明け以後は，諸学費納付時期と重なり，購買力は急速に衰微した。1986年1月以降チティアヴィも店頭には立たず，縁故の青年1名に店番を委ねた。同年3月に再訪した際には，常備商品の品目，数量ともに減じ，商品補充も円滑を欠いた。チティアヴィの経営意欲，努力，収益はいずれも低下して見えた。

V　問題点

環境利用の観点から生業形態を顧る場合，地質や気象など自然条件に加え，現地の文化・社会的要件を考えねばならない。ブタリ近辺の自然条件はコーヒーおよび砂糖きび栽培に適合した。しかし現実には白とうもろこし作付けが大勢を占めた。この地方へはコーヒー樹育成の本格的導入はなく，少数農家が試行中であった。コーヒー集荷，出荷の政府施設は未整備で，生産者側に収益と換金面の不安が残った。砂糖きび栽培は比較的広く普及したが，運搬と製糖工程の劣悪条件および代金支払延滞が枷となり，副次的生産の域に留まった。白とうもろこしは，土壌の酸度過剰と降雨開始不定期により必ずしも有利な作付け品種でないが，主食の自家消費分確保と換金作物留保の願望が単作栽培を促した。[18]

農業生産の安定と拡大化を意図し，ケニヤ政府は資金助成に努めた。すなわち農業融資公社(Agricultural Finance Corporation)を介して，1980年以降5ヶ年間に14億シリング(約150億円)を季節貸付(seasonal

credit)の枠内で融資した。毎年白とうもろこし播種の前に種子と肥料，生活費など必要資金を貸付け，収穫後に返済させる制度であった。債務者の農地を抵当物件としたが，不正融資と返済延滞が頻発し融資事業の根幹を揺がした。1985年秋には上記融資額の半額近い6億4,000シリングが返済未了となった。たしかに前年の旱魃が白とうもろこし生産量を減じ，返済困難の事情を導いた。しかし自然災害以上に不正怠慢などの人為的要件がこの種の弊害を招いた。[19]

小規模手工業では鍛冶，窯業など伝統技法に依存する分野に加え，都市化・西欧化が創出した新分野が開かれた。洋裁，家具･建具製作，自転車およびラジオ修理など多岐にわたった。政府は技芸専門学校を増設して技能職従事者の養成に努めたが，なお農村生活様式改革と購買力増強は実現に到らなかった。手工業製品の利用度を高め，購入手段取得を図るには，小規模手工業の多様化，職人増加，流通経路整備が不可欠であった。現実には職人自立と専業化に多額の経費負担と習練期間が求められた。2ヶ年の専門教育修了の学費と諸経費，徒弟修業の費用，工具一式，材料費，店舗賃借料準備などの資金調達であった。製品販路と施行依頼獲得も各自職人の努力による開拓に任された。

都市部では家具什器の需要が拡大した。しかし西欧的生活様式に傾いた都市住民は，地方製作の在来型手工業品を好まず新奇な型式，デザイン，配色の製品を求めた。地方製作者に対する都市的生活様式の啓蒙と，新規な製品創出の意欲鼓舞が地方手工業振興の前提条件となった。テレビや雑誌など視覚通信媒体に乏しい僻地では，技芸専門学校の設備，教科内容，教員の充実と質的向上が急務であった。他方では，地方から都市への製品輸送，保管および販売の施設および処理機構の整備が必要となった。同業者組合または協同組合の結成も重要視された。工具や用材の購入資金あるいは生活費補助など各種融資，技術開発と教育指導，販路拡張，製作・施工依頼仲介が円滑化しよう。とりわけ遠隔地の都市部での販売，運送の利便と中間利潤削減が確保できよう。ただ経済効率の

みを偏重して人件費，搬送料，毀損など負担を過大視すれば，広域地域経済の発展は望みえない。むしろ都市部への手工業技能者糾合による末端地域の経済的不活性化進行，都市と地方の生活水準格差の拡大が助長されよう。この場合，資本力にすぐれた大規模私企業の参入が価格競争を激化させ，小規模組合の厚生事業的経営の倒壊を導く危険も予測される。政府と地元関係機関による保護・助成的対策が不可欠である。

ブタリ近在では商業活動が盛況を呈した。しかし大半は非専従者の営業であり，常設商店も品目特定化，専門化が遅れた。類似品目の多数業者による販売が，商品回転率と利潤の低下を生み，商業活動の拡大を阻んだ。すなわち販売収益は商業経営への再投資へ還流する以前に土地や家畜購入，婚資あるいは教育費支弁に充当された。営業規模拡張，特殊化・専門化に必要な資本蓄積への配慮は乏しかった。政府の金融助成の途は開けたが，高利率による危険負担は大きく，回転率良好な品目の優先仕入れ，記帳と収支決算の把握など経営管理指導が必要であった。さらに末端地域での警察治安能力の強化が望まれた。夜間の店舗侵入，人身危害，商品強奪が頻発し，商店経営者の不安，動揺が認められた。警察機動力とパトロールの増強が急務とされた。

自然および人為的環境の有効利用と，末端地域経済振興には，農業，手工業，商業の均衡維持的な育成が望ましい。食糧自給は最重要課題だが，欧米生活様式の浸透は僻地住民の工業製品消費意欲を刺戟し，もはや生存経済(subsistence economy)への固執を不可能とした。しかし農民の長期離村による都市出稼ぎは末端地域と都市の生活水準格差を拡大する。換金作物栽培の奨励と，都市住民の需要に対応した手工業生産育成がより適切な方策であろう。政府関係および国際援助機関の助成が不可欠ではあるが，同時に出荷，販売の便宜助長のため諸規程，手続の改善，弾力的運用も要請される。代価支払い迅速化も望まれる。さらに末端地域住民の自助努力が重要視される。農民，手工業従事者，商人が同業者組合あるいは協同組合を結成し，実情に即した改善方策を見出すなら，

より効果的，永続的な地域経済の振興，社会基礎的施設(infrastructure)の充足がえられる。それには第一に利己的思考行動様式の克服，第二に自主的互助協力，第三に積極的かつ公平なリーダーシップの発揮による農村開発計画の立案と，地元，周辺地域，広域行政圏内関係者の提携による実施が必要である。[20]

注

(1) Amos Rapoport, (ed.), *The Mutual Interaction of People and Their Built Environment, A Cross-Cultural Perspective,* Mouton, the Hague, 1976, p.28.

(2) 調査の成果は以下の機会に紹介してきた。(i)「ケニヤ農村開発の現状——教育・経済面の自助努力」，ICU社会科学研究所公開講演会，1986年2月，(ii)「西ケニヤ農村の生業形態——農民，職人，商人」，国立民族学博物館共同研究会，1986年5月，(iii)「ブタリ地域開発と互助協力——ケニヤのカプラス族農村調査」，日本民族学会第24回研究大会，広島大学，1986年5月。
本稿は主として報告(ii)に依拠した。

(3) Gideon S. Were, *A History of the Abaluyia of Western Kenya,* East African Publishing House, Nairobi, 1967, p.31. ただしWereは1883年にこの地方を通過した探険家J. Thomsonの著書(*Through Masai Land,* 1885, p.481)から引用した。

(4) Celia Nyamweru, *East Africa, Geography for Standard 6,* Oxford University Press, Nairobi, 1978 (reprint, 1981), p.33.
ここにはカカメガあるいはブタリ近在の地点の平均気温の年間表示はないが，緯度および標高が比較的近似するキトゥイ(Kitui, 1°4′S，標高1,088m)の月別年間平均気温を採った。

(5) Günter Wagner, *The Bantu of North Kavirondo,* Vol.1, Oxford University Press, London, 1949, p.6.
カカメガ市近辺の月別年間降雨量は1921年から1935年にかけて測定された。

(6) John Osogo, *A History of the Baluyia,* Oxford University Press, Nairobi, 1966, p.49.
しかしブタリ村在住の元小学校教員ムワチ(Jackson Mwachi, 1926年生)は，異説を唱えた。すなわち1943年に政府の調査団がこの地方を訪れた折，たまたま狩猟を主な生業とするニャラの一群と遭遇した。彼らはニャラ(Munyala)という人物の子孫であったが，狩猟で生活する者という意味のbarasiと呼ばれていた。それ以降，この地方に住むニャラ族の出身者は農耕従事者も含めてカプラシまたはカプラスと呼ばれた。(1985年10月15日聴取)

(7) Osogo 1966, 前掲書，pp.40, 47, 49, 93.

ウェレ(Were 1967, 前掲書, pp.71-72)は異説を立てた。すなわち湖岸のNyala族から分かれた集団が北上して，後にウガンダ東部のムバレ(Mbale)地方から多数来住した人々と合流し，現在のカブラス族を形成した。

(8) Osogo 1966, 前掲書, pp.28, 41, 47, 49.

(9) G. H. Mungeam, *Kenya, Selected Historical Documents, 1884-1923,* East African Publishing House, Nairobi, 1978, pp.121-123. A.T. Matson, *Nandi Resistance to British Rule, 1890-1906,* East African Publishing House, Nairobi, 1972.

(10) ケニヤの総人口は1979年センサスで1,514万3,000人弱であった。そのうちルイヤ語族はおよそ14%に当たる211万9,700人を数えた。ただし，カブラス族の人口を示す数値は不明である。本文に掲げた1918年センサスでは，ルイヤ語族18万895人の5.1%がカブラス族とされた。また1932年センサスではルイヤ語族19万8,355人の5.5%をカブラス族が占めた。これらの比率を援用すれば1979年センサスのルイヤ語族の約5%強として，カブラス族は10万人を越えた計算になる。ケニヤの総人口はそれ以降1984年迄に27.5%弱の増加を生じたので，カブラス族も12万ないし13万人に達したと思われる。

(11) The Daily Nation (ケニヤの英文日刊新聞，ナイロビ市で発行)，1986年3月9日付記事。カカメガ県の人口は同紙によると約130万人であった。

(12) ブタシ(Butasi, 1928年生)は耕地25エーカー，牛35頭を保有し，白とうもろこし8エーカー，砂糖きび3エーカーを作付けた。(1985年)　ワシケ(Wasike, 1930年生)は耕地23エーカーと牛9頭を保有し，白とうもろこし4エーカー，砂糖きび2エーカーを作付けた。(1985，1986年)　またクブヨ(Kubuyo, 1920年生)は耕地30エーカー，牛16頭(うち乳牛6頭)を保有し，白とうもろこし(作付面積未聴取)と砂糖きび(1985年収穫)2エーカーを作付けた。これら3名はそれぞれ小学校教員(定年退職者)，出稼公務員，家具製作者を経て，農業に専従してきた。

(13) ネーション紙(1986年3月3日)によれば，砂糖の国際価格は1980年から1984年までの間に，トン当たり4,780シリングからほぼ3分の1の1,617シリングに下落した。その反面でケニヤ国内の国営工場渡しの砂糖価格はトン当たり2,800シリングから4,773シリングに高騰した。この過大な逆さや現象により，ケニヤでは国内産よりも輸入砂糖がより安価な供給源に転じた。しかし国内砂糖生産奨励のため政府は逆さやを厭わず，公定買上げ価格の高水準を保持した。

(14) The Standard (ケニヤの英文日刊新聞，ナイロビ市で発行)，1985年7月8日付記事。

(15) カブラス族は男児割礼の慣習を存続させ，12－13歳の少年を民間療法者の手で施術させた。この際，父親は縁戚，隣人を招宴し盛大に祝った。しかし旧くは20歳を越えた青年に割礼を施し，成人の徴とした。現今の住民登録(Registration)は，男女とも満18歳に達した日が指定され，県庁に出頭して両手10指の指紋押捺を求められた。しかし登録時に個別該当者宅での行事はなんら催されなかった。

(16) カカメガ市には常設公営市場が設置され，さらに毎水曜日と土曜日に露天市が立って活発な交易が行なわれた。ここに専業，非専業の売り手が集い，青果，穀物豆類，干魚のほか新品，中古の衣料や日用雑貨を多種大量に商った。しかし家具，什器類の販売は見かけなかった。

(17) ブタリ交易センター近辺の地価は，農地1エーカー当たりで8,000から1万シリングであった。従来は20－30エーカーを所有する農家も珍しくなかったが，それらを抵当としても100万シリングの出資は容易ではなかった。農民対象に土地を担保に取る融資は，農業融資公社(Agricultural Finance Corporation)が行ない，また小規模商工業者向け金融も制度化されていたが，いずれも年利14%以上で債務者の負担はきわめて重かった。

(18) ケニヤ全国農民連合会(Kenya National Farmers Union)は植民地統治時代から存続した農民育成と保護の民間全国機関であった。カカメガ県には支部を設置し，常任の農業指導員ムスング(Musungu, 30歳代半ば)に現地巡回指導を実施させた。ムスングによればこの地方の自然条件は白とうもろこし栽培に不適合で，コーヒー樹と砂糖きびの作付けに適した。海外協力事業団派遣の西村農業専門員も同意見であった。

白とうもろこしは年間降水量600－900mmの少雨地帯でも生育するが，播種は降雨開始の2週間前が望まれ，播種時期に2週間の遅れがあると収穫量は25%減少する。(ネーション紙1985年2月10日付)

(19) 農業融資公社は1963年創設された。1980年度以降5ヶ年間の返済延滞額は合計6億4,000万シリングに達し，1985年度融資予算7億5,000万シリングの87%近くの巨額未収金となった。政府は債務者が白とうもろこしを政府買上げ機関に売渡し，債務相当額を相殺させるよう試みた。

不正融資の例には抵当とすべき農地を持たずに3万5,000シリングを借用，同一の農地を担保に別な3人が合計7万1,000シリングを受領，また3万2,000シリングの抵当とした農地を無断で売却，などの場合があった。(ネーション紙1985年10月3日，同年10月10日付)

(20) ケニヤの農村社会学者ムビティ教授(ナイロビ大学)は農村開発における住民の自助努力(self-help, *harambee*)の役割を強調した。自助努力成功の要件は (1)伝統的な組織基盤，(2)住民活動の自律性，(3)政府の援助，(4)利己主義の克服，および(5)仲間意識，参加，リーダーシップ強化に役立つドラマティックな行動の導入，と指摘した。(P. M. Mbithi, "Agricultural Extension as an Intervention Strategy: An Analysis of Extension Approaches," in D. K. Leonard, ed., *Rural Administration in Kenya,* East African Literature Bureau, Nairobi, 1973, p.91.)

FORMS OF EARNING A LIVELIHOOD IN A VILLAGE, BUTALI, OF WESTERN KENYA

≪ Summary ≫

Motoyoshi Omori

The natural conditions, society and culture intersect so that people may earn their living at a particular locality during a specific period of time. Over the rolling hills at a high altitude, 1600 m, close to the equator, the Kabras farmers raised their principal crops, white maize and sugar cane, alongside of keeping their livestocks. The increasing demand for monetary income made them innovate their traditional ways of earning a livelihood; replacement of sorghum and finger millet with those crops mentioned above, attaining skill of some handicraft, establishment of one's business as a trader or running one's own shop in the locality. The innovation manifests ongoing reactions of the local inhabitants to rapidly changing circumstances and implies renovation of, at least a part of their existing built environments.

Agriculture was promising owing to a moderate rainfall, 1,000 mm, and fertile soil. A rotational use of lands without any fertilizers allowed the farmers to raise sufficient amount of crops for self-supporting. The lands and the manpower had, however, not been fully exploited on account of the monoculture, transportation and manufacturing disadvantages and administrative deficiency. A remarkable increase of crop production would be achieved on condition that the cultivators might have much easier access to fertilizers/drugs, vehicles, quicker payment of the purchased crops and agricultural loans. The governmental efforts were also required to improve the operation of sugar manufacturing factories, management of storing and marketing the crops and administering the legal regulations on transportation and sale of crops.

Local polytechnics, 320 in Kenya, trained handicraft workers at large. A period of apprenticeship was, however, prerequisite to be a professional craftsman and the one should have paid all the expenses such as school fees for two years, living costs during the apprenticeship, prices of tools and materials. Despite the high demand for furnitures in the urban areas, more Westernized designs and shapes were preferred. Enlargement of local industries would be accomplished by vocational retraining at polytechnics, establishing marketing routes, organizing co-operatives of the craftsmen and expanding financial assistance to the individuals.

Trade was active in the local commercial center where a market was open two times a week. Even though being a minority, some villagers were engaged in trading in full; a dealer of dried fish and a runner of a grocery, for example. The traders faced to the similar difficulties such as availability of no credit for stocking, no security of their business in case of illness or robbery, and unstable demand for the commodities in accordance with the seasonal changes, i. e., wet vs. dry, and seeding vs. harvesting. Prevailing scarcity of monetary income hindered progressive expansion of the local commercial activities. Incessant monetary supply by any foreign or governmental assistance would solely raise economic activation for short duration.

In summary, eager demand for money in a rural region had modified the ways of earning a livelihood of the inhabitants, who would not be satisfied with crops for subsistence but with those of cash obtaining. Increase of monetary supply should, however, be achieved through an activation of the regional industries including agriculture, handicrafts and trading. Certain proposed revision and improving devices would be an effective incentive for the farmers to multiply their maize and sugar cane which would lead to increment of monetary income. The money would stimulate potential demand for more industrial commodities on sale at the local market and groceries as well as the indigenous products. In consequence, the resultant economic vigorousness would eventually enrich the infrastructure of the locality and lift the level of living standard which differed from that of the urban people in this developing state.